

【課程-2】

審査の結果の要旨

氏名 和田智貴

ある傷病について施設症例数と患者アウトカムの評価することは、その傷病を持つ患者を特定の施設に集約化して診療することの是非を検討する上で重要である。本研究は日本の大規模入院データベースである **Diagnosis Procedure Combination** データベースを用いて外傷診療における施設症例数と患者アウトカムの評価したものであり、以下の結果を得ている。

1. ICD-10 コードに基づいた外傷死亡予測スコアモデルを作成した結果、体幹部血管損傷や外傷性脳損傷が患者の院内死亡に対して強い影響を持つことが示された。
2. 入院当日に **IVR** もしくは緊急開胸/開腹手術が行われた重症体幹部外傷患者について、施設症例数と患者アウトカムの間には負の関連があった。重症体幹部外傷患者は特定の施設に集約することで患者の予後が改善する可能性があることが示された。
3. 一方で、入院時に **JCS I-2** 以上の意識障害を伴う外傷性脳損傷患者について、施設症例数と患者アウトカムの間には明らかな関連が認められなかった。外傷性脳損傷患者は上記の重症体幹部外傷患者と異なり、特定の施設に集約しても患者アウトカムには明らかに影響しないかもしれないことが示唆された。

以上、本論文は本邦で発生する外傷の中で重症体幹部外傷と外傷性脳損傷が患者死亡と強く関連していることを明らかにした。そしてそのような重症患者の中には特定の施設への集約化により予後の改善が見込める患者と、必ずしもそれが見込めない可能性がある患者が存在することが示された。本邦で外傷センターを設置する場合、全ての外傷患者をその施設に集約するのではなく、集約により予後の改善が見込まれる外傷患者を優先的に集約することが、外傷診療の質を向上させるための現実的かつ効率的な方法の1つであると考えられた。

本研究結果は地域レベルでの外傷診療の質の向上に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。